

哲学的言説と政治的リアリズム：

グローバル・ウェスト

20世紀の遺産

ステファン・ヘーグル博士によるエッセイ

ある哲学者の呼びかけ

ソフトウェアによる未検証の翻訳

20世紀前半の初版

目次

哲学、歴史、政治：政治的リアリズムとグローバル・ウェスト 5

グローバル・ウェスト：普遍的主権の哲学とビジョン 7

西欧の公理 18

エピローグ：これからの四半世紀に向けた三つの格言 19

私がこの世を去った後、歴史が私について何を語ろうとも、私が皆さんの最悪の恐怖ではなく最高の希望に、疑念ではなく自信に訴えかけたことだけは記録されることを願っています。私の夢は、皆さんが自由の灯火に導かれ、機会の腕に支えられながら、これからの道を歩んでいくことです。

ロナルド・レーガン (1911-2004)¹

自由の友たちに捧ぐ

1

1992年8月17日の共和党全国大会における演説より。ロナルド・レーガンは第40代アメリカ合衆国大統領であり、当時のソビエト連邦指導者ミハイル・ゴルバチョフとの間で、広範な緊張緩和のプロセスを開始した。

皮肉屋は価値観を等価かつ手段的なものと扱う。政治家は道徳的信念に基づいて実践的な決断を下す。……私にとって、現実政治（リアルポリティーク）の賢明な定義とは、外交政策を行う上で不可欠な客観的状況が存在するということを目指す。国家が直面している状況を見ずにその運命を扱おうとするのは、現実逃避に他ならない。¹

ヘンリー・A・キッシンジャー（1923-2023）

哲学・歴史・政治：政治的リアリズムとグローバル・ウェスト

歴史の時代の終わりに、哲学、政治、そして世界史が20世紀ほど劇的に絡み合ったことは稀であり、我々は今もなおその余波の中に生きている

。曆上の終焉から四半世紀が経過した今も、その遺産はほとんど認識されておらず、それゆえに数多くの政治的紛争が収まる気配を見せていない。これは特に、数多くの緊張と対立軸が形成された世界の政治舞台において顕著である。状況の複雑さは今や多くの現代人を困惑させ、かつて抱かれたより良い未来への希望は、とっくに諦観の感情へと取って代わられてしまった。

とりわけ国際関係においては、不誠実な野心に駆られるのではなく、個人の責任感と必要な先見性を持って職務を遂行する、言い換えれば「現実政治（リアルポリティーク）」を理解する政治家が必要とされている。現実政治の政治家として卓越しているとされるヘンリー・キッシンジャーが上記の引用で述べたように、これが客観的な条件を考慮することを意味するのであれば、我々は目の前の状況、すなわち現実に導かれる舵取り役を必要としている。

実際、危険な海域を船で航行しようとする者は、常に他の船、自らの潜在能力、そして潜在的な敵の能力に目を光らせなければならない。舵取

¹2009年7月5日付の雑誌『DER SPIEGEL』（2009年28号）のインタビューより。

りは、関連性を持つ可能性のあるあらゆる事柄に注意を払うだろう。彼にとって重要なのは、事実、実際の状況、すなわち現実的な視点である。

しかし、彼の理想主義的な心は、海の地平線の彼方へと大胆に視線を向ける——彼の胸の中には二つの魂が鼓動している²

。荒波の中でも、希望と確信の島を探し求めるのだ。

月明かりの下、船長は平和と友情の歌を口ずさむ。世界的な兄弟愛を謳う賛美歌が、彼の心を揺さぶる。しかし、荒れ狂う海の嵐が、その繊細なメロディーをかき消してしまう。理想とは、星降る夜空を一瞥するようなものだ。誰もがそこに同じメッセージを見出せるかどうか、誰が知るだろうか？

事実とビジョンの対立において、経験豊富な舵取りが心に留めておかなければならない、両陣営の間に第三の次元が現れている。それは水深の条件——容易には見えないが、紛れもなく存在する渦や潮流である。これらは水の現れであり、その元素的な性質が、今や大規模な形で現れているのだ。川、湖、海において、水の振る舞いは現実の一部であり、それゆえ航行に影響を及ぼす。

深淵を覗き込むことは、実のところ人間の本性、すなわち人間の条件——コンディティオ・ウマナ——を見つめることに他ならない。人間という根本的な存在を無視して、どうして政治の本質を測り知ろうなどということが出来るだろうか？確かに、実存的な問いは当初、哲学的・神学的な領域を指し、しばしば個人的な意義を持つものである。

しかし、究極的には、人間の本性は、広範な意義を持つより大きな世界観の中に織り込まれている。だが、もしこの現実の深淵から、不変の定数として形作られ——したがって現実である——潮流を読み取ることができたとしたらどうだろうか？

理想主義的な理論は、常に最善の状態を念頭に置くべきである以上、単に自らの立脚点を失わないために哲学的な議論を求めることになるだろう。しかし、政治的リアリズムは、人間の置かれた状況にさらに焦点を当てなければならない。つまり、根本的な実存的問いを分析的に論じるよりも、むしろ実践的な帰結を算定できるようにすることに重きを置くのである。現実のあらゆる側面が考慮されて初めて、*真の現実政治*（リアルポリティーク）について語る事ができるのだ。

² キッシンジャー：「理想主義の要素なしに現実主義はあり得ない。」

本書は、この包括的な視点に捧げられたものである。

「グローバル・ウェスト」は、そのルーツがはるか過去に遡るにもかかわらず、20世紀の歴史と特別な形で結びついている。その基盤は人間の条件と密接に結びついており、その政治的、とりわけ地政学的な帰結は、まだ予測できない時代への道筋を示している。概念的かつ実質的な分析は、西洋の根本的な公理に到達し、*真*の現実政治が将来心に留めておくべき格言を列挙する。

『グローバル・ウェスト』 普遍的主権の哲学とビジョン

対立とレトリック

「グローバル・ウェスト」という新たな用語が政治の場に登場した。これに先立ち、20世紀の最後の10年間に普及した二つの概念がある。一つは、世界的な相互接続性と相互依存性の高まりを説明する概念として現れた「グローバルイゼーション」、もう一つは、開発途上国を指すより親しみやすい用語である「グローバル・サウス」である。³

「グローバル・ウェスト」という言葉が語られるようになったのは、21世紀に入ってからのことであり、現在では政治的、とりわけ地政学的な語彙として定着しつつある。これは通常、20世紀後半を支配した東西対立の時代に、かつて「*西側世界*」または「*西側*」の一部として分類されていたすべての国家を指す。

西側には、米国を筆頭とする立憲政府を持つ自由民主主義の工業国があり、東側ではソビエト連邦の同盟国がこれに反対していた。ヨーロッパの分断が終焉を迎えると、すぐにグローバル化の議論が持ち上がり、そ

3

両用語とも1950年代や1960年代にまで遡ることができるが、1980年代までは時折使われる程度だった。「グローバル・ノース」という用語についても同様である。

れは世界貿易に限った話ではなかった。

世界は「地球村」となり、地球規模の問題がより良く解決できるようになったかのように見えた。国連などの組織の枠組みの中で、究極の目標は「グローバルな国内政策」を確立することにあった。⁴

こうして、1990年代は比較的緊張が緩和された10年となった。

それから数十年が経った今、「グローバル・ウェスト」という言葉が語られる際、それは通常、権威主義的⁵

あるいは全体主義国家による修辭的な攻撃である。彼らは、他のすべての国家にとって脅威となる、強力で世界的に活動する同盟というイメージを描き出そうとしている。

これに対抗するのが「グローバル・サウス」の諸国である。これは漠然と定義された国家群であり、それぞれの野心は異なるものの、いずれにせよ「グローバル・ウェスト」の一部とは見なされず、むしろその犠牲者と見なされている。疑わしい場合、権威主義国家は自らをグローバル・サウスの一員と見なすか、少なくともそれとの連帯を宣言する。

この想定される世界的な対立構図は、20世紀に工業国と発展途上国の関係を説明するために用いられた「南北対立」を彷彿とさせる。不平等を記述することに加え、その焦点は常にこうした状況に対する責任の所在にあり、それはしばしば工業国に帰せられていた。

もし今日の問題が単に世界の富の分配に過ぎないのなら、「グローバル・ノース」という表現の方が適切だろう。もっとも、この用語でさえ限定的な範囲でしか通用しないが。しかし、この言葉は一般的には使われておらず、社会主義や共産主義志向の国家の総称となり得る「グローバル・イースト」も同様である。実際、問題は富だけにあるわけでも、冷戦時代のイデオロギー的遺物にあるわけでもない。

結局のところ、「グローバル・サウス」とは、修辭的に悪魔化された「西側」の対極として機能することを意図した、扱いにくい用語であり、それゆえに可能な限り曖昧で不確定なものである。それは、構成が決し

4

この用語は1963年に物理学者兼哲学者カール・フリードリヒ・フォン・ヴァイツゼッカーによって初めて用いられたが、ヨーロッパにおける民主化の波と共にようやく広まった。

5

批判的に見れば、この用語は権威主義的な子育てを連想させる婉曲表現だが、それにもかかわらず、子供に対するある種の愛情や敬意を特徴づけることができる。個人の尊厳や権利を蹂躪する独裁政権に対する「権威主義的」という表現は、内容面において明白な、広範なポリティカル・コレクトネスに起因している。

て均質ではないものの、西側との差異を主張し、しばしば自らをより優れた選択肢として提示しようとする権威主義国家群を指す。⁶

地理と歴史

今日の西側の政治化とはかけ離れて、その概念的な起源は主に、西洋と東洋に関する言説を形作ったヨーロッパ中心主義的な地図学にある。東洋——日の出の地——は、太陽が再び沈む西洋と対比される⁷。西洋が大西洋で終わるのか、あるいは新大陸の発見後は米国で終わるのかは意見が分かれるところであり、東洋がアラビア半島にあるのか、はるか遠くの日本にあるのかも同様である。結局のところ、地球上のあらゆる地点には独自の、したがって相対的な基準点があるため、この文脈における「西洋」という言及には歴史的な含意が伴う。

近現代史の過程において、かつては地理的な対比に過ぎなかったものが、イデオロギー的な対立へと変容し、現在では地政学的な意義を帯びるようになった。しかし、その原因や傾向は極めて多様かつ矛盾に満ちており、当初の対立関係はとっくに特定の地域や宗教を超越した段階に入っている。

しばしば引用される西洋と東洋の宗教の対比でさえ、詳細に検討すればはるかに微妙なニュアンスを持つものである。⁸

「科学的な西洋」と「非進歩的な東洋」との区別も同様に限定的なものである。地域や文化圏によっては、この対比は過去にも現在にも確かに観察され、しばしば極めて鮮明な形で現れている。しかし、これは他の大陸や社会にも当てはまる。歴史的に見れば、様々な発明は東洋に起源を持ち、

哲学的著作はアラブに征服されたスペインを經由してヨーロッパに伝わり、16世紀以降、新興科学の分野で主導権を握ったのはスペインであった。

6

主要な政治用語もまた、競合の対象となっている。例えば、中国政府は、2021年にバイデン米大統領が開いた「民主主義サミット」に対し、「機能する民主主義」と題する文書で応じた。

7

古代ギリシャ語の *Ἑσπερος*

hesperos (夕方) やラテン語の *vesper* (夕方) は、インド・ヨーロッパ語族の語根 *wes- (夕方/夜) に由来する。

⁸確かに、キリスト教一神教の西側は、歴史上の特定の時期および地理的な範囲内において、概してヒンドゥー教や仏教が主流の東側と対比させることができる。しかし、古代エジプトやペルシャにおける一神教的潮流、東洋の諸宗教、さらには西洋世界における汎神論的潮流など、逆の傾向は無視してはならない。

こうした文脈において、ドイツの社会学者マックス・ウェーバーは、東洋と西洋の経済システムを区別し、後者に高度な合理性を帰した。個人的な関係に代わって、冷静な価格計算が市場活動を支配し、それによって生産の効率が向上したのである。

20世紀に入ると、西側工業化諸国の成功は、同様の近代化、すなわち潜在能力⁹

）を開発したいと願う多くの国の関心呼び起こした。一方で、一見遠く離れた東洋（およびその先）の文化への憧れは、ヨーロッパにおいて長い伝統を持っている。

こうした相反する潮流や展開にもかかわらず、一つだけ明らかなことがある。今日対立の核心をなしているのは、異なる宗教的伝統や建築様式、言語、あるいは習慣ではないということだ。それらは対照を伴うものであり、その一端を浮き彫りにするかもしれないが、その根源ははるかに深く、とくに地理的な枠組みから切り離されている。それは、人類の存亡に関わる問いと、哲学が提示する答えに関する問題なのである。

哲学と政治

今日、私たちが哲学の揺籃を古代ギリシャに位置づける際、多くの文化において様々な思想や概念が生まれ、おそらく議論はされたものの、決して書き残されなかったかもしれないという認識を伴っている。こうした展開が歴史的に実体を持つのは、思考の道筋が跡形もなく終わるのではなく、社会へと浸透し、受け継がれていくときだけである。¹⁰

この点において、ギリシャの哲学者たちは歴史的な飛躍を成し遂げた。彼らが世界と人類の立場とのつながりについて考えた方法は、彼らに歴史書における永遠の地位を確固たるものにした。ここに自然科学と人文の歴史的出発点があり、ここに「グローバル・ウェスト」の哲学的基盤があり、そしてここにはその名称の由来も見出されるのである。

9

この点において、「発展途上国」という用語は、当初、未来への希望を帯びている。発展という目標は、当然ながら、経済的および政治哲学的な目標を指す。

10

哲学的概念の伝統は、互いに独立して、多くの先進文明に見出すことができる。哲学者カール・ヤスパースも、紀元前800年から200年頃までの期間を「軸の時代」と呼んだ。なぜなら、この数世紀の間に、中国、インド、そして西洋において、互いに知らぬままに、中心的な哲学的基盤が「ほぼ同時に生じた」からである。

（『歴史の起源と目的』、1949年、20頁）。

地中海地域における文化交流と活発な物資の交易が相まって、存在に関する問いについて自由に議論できる風土が育まれたとき、ギリシャ哲学は花開いた。ホメロスによって伝えられた伝説ははるか昔のものとなり、勇敢な思想家たちは古くからの問いに対する新たな答えを模索していた。

この新たな道の第一歩は、自然とその作用の解明である。原初的な物質や元素に関する最初の理論が登場するが、技術的な手段が不足していたため、検証することはできなかった。しかし結局のところ、単なる推測以上のものが残されている。すなわち、原子、元素、原初原理といった根本的な可能性は、現代物理学の誕生より2500年も前のこの時代に、すでに定式化されつつあったのである。

ギリシャ哲学の第二の柱は、人間の本質を扱うものであり、それは個人としての人間にも、社会における役割を担う人間にも影響を及ぼす。それは、知識、正しい生き方、そして共同体における共存という根本的な問いに向き合う。したがって、最も広い意味において、議論を決定づけるのは政治¹¹

と倫理に関する問いである。ここでもまた、今日の近代理論の基礎を成すモデルが開発されている。全体として、ギリシャ哲学はこうして西洋文化の中心的な知的基盤を提供している。¹²

新たな始まりが、大航海時代を告げた。中世末期、かつての古代ギリシャと同様に、貿易の拡大は都市の繁栄と結びつき、その富によって科学と文化が花開いた。ヨーロッパ各地に大学が設立された。

自然科学の台頭により、自然の法則を解明し、未知の地域を探検し、世界中に新たな航路を見出すことがますます可能になった。研究の始まりは、まもなく技術、医学、日用品の生産のあらゆる分野において前例のない進歩をもたらし、その発展は今日まで続いている。それ以来、科学の進歩とその成果は人々の生活を形作り、西洋のライフスタイルの象徴となっている。

11

ここでいう政治とは、人間を「ゾノン・ポリティコン（社会的存在）」と定義したアリストテレスに従い、広義に理解される。

12

これに加え、ローマ法の原則、そしてヨーロッパにおいてはユダヤ・キリスト教の影響がある。これら3つの要素は、ヨーロッパを構成する柱と見なされている。ギリシャ・ローマ古代の終焉は、しばしば紀元前529年のアテネにおけるプラトンのアカデメイアの閉鎖と結びつけられるが、それと同時に、モンテカッシーノに最初のベネディクト会修道院が設立された。これは、キリスト教の影響を受けたヨーロッパ中世における画期的な出来事であった。

しかし、研究と科学は普遍的な現象である。それらがヨーロッパ・西洋文化の中で飛躍的な進展を遂げたとはいえ、理論と実践における世界への科学的アプローチが、いつの日か世界中で当然のものとなることは予見できる。

とはいえ、科学の進歩とその成果は、「西洋のアイデンティティ」の一部に過ぎない。西洋を構成する要素として不可欠なのは、人間を、私的領域における不可侵の自由の権利と、政治的・社会的意思決定に参加する権利を有する個々の主体として捉える理解である。国家の権力は本質的に主権者——すなわち国民——の意志に由来する一方で、個人の主権は不可侵の人間の尊厳に由来する。

人間性に関する初期の考察から、ギリシャ哲学や啓蒙時代を経て、今日の「西洋的」理解に至るまで、それは数多くの矛盾や挫折を伴う長い道のりであった。それでもなお、最終的に、自由を志向する民主的社会の基盤を形成するのは、まさにこの人間像なのである。

そのような社会において、国家の任務は、一人ひとりの個人の自由を保障し、適切な手続きを通じてあらゆる政治の民主的な起源を確保することにある。実務上、法や規制が必要であると同様に、裁判所や当局も必要であるため、「西洋的」な国家は、緩やかで拘束力のない共同体としてではなく、憲法国家としてのみ存在し得る。個人は、自らの尊厳と権利が常に保護されていると信頼できなければならない。

主権と主権たち：究極の正当化

西洋は、上述した人間尊厳および個人的・政治的主権の概念に依存している。これは哲学的概念であると同時に、政治的、さらには地政学的なパラダイムでもある¹³

。人間観——そしてその究極的な正当化——は、どのような政治的、社会的、経済的、文化的秩序が人間の本性にふさわしいかを決定する。我々は、この秩序が時を経て定着することを、宇宙の性質に合致する科学的世界観が定着することを確信するのと同様に確信できる。

最も一般的な反論は自然科学の分野から提起されるものであり、次のように要約できる。宇宙におけるあらゆる過程は物理法則に従って起こるため、これはあらゆる物体、生物、そして人間にも当てはまる。心臓の

¹³

解釈と理解のための包括的な枠組みとしての「パラダイム」という概念は、この場合、特に妥当であるように思われる。なぜなら、それは科学的・理論的レベル（その起源となるもの——トーマス・クーン、1962年を参照）に加え、実存的、実践的、そして（地政学的）政治的基盤にも及んでいるからである。

鼓動から脳内の微細な過程に至るまで、すべては純粹に物理的な性質を持ち、生物学の分野における時計仕掛けの機構に似た、長く複雑な因果関係の連鎖の一部に過ぎない。

人間には、自然法則を超えた繊細な魂も自由意志も存在せず、いかなる尊厳も確認できない。科学的研究によって解明できないものは、実在しないのである。¹⁴

この「自然主義的」世界観は、科学の成功が積み重なるにつれてますます多くの支持者を獲得してきたが、根本的な欠陥を抱えている。たとえそれが物理的な命題であるかのような印象を繰り返し与え、いわば長年の研究の結論であるかのように思わせても、真実はその逆である。物理的世界観の適用範囲に関する問いは、もはや物理的な問いではなく、哲学的な問いであり、したがって全く異なる次元に存在する。

ここではほのめかすにとどめるしかないが¹⁵、自由意志や人間の意識を神経プロセスに還元しようとしたり、倫理的な問いを単なる心理状態に置き換えようとしたりすると、哲学的な議論において重大な問題が生じる。

しかし、人間に対する自然主義的見解は、道徳的・審美的問題を無意味な空虚な概念として¹⁶

退け、人間の正義の追求や意味の探求を、脳による複雑な幻覚や投影として退けなければならない。脳は、生体組織を制御する極めて複雑な装置¹⁷

であり、最終的には生化学的な因果関係によって決定されるものである。

したがって、自律的な存在としての人間の自己像は、必然的に、物理的プロセスに加えて、人間の精神、尊厳、そして自由に基盤を提供する超越的な現実が存在することを前提としている。ちなみに、これは世界の物理的構成にも当てはまり、その原因は再び物理的なものではあり得な

¹⁴ デヴィッド・ルイス (1983, 361) : 「世界は物理学が言う通りのものであり、それ以上言うことはない」。この立場は、唯物論、実証主義、経験論などいくつかの名称で呼ばれるが、本質的には常に同じ前提に基づいている。

¹⁵ このエッセイの別個の序文に、いくつかの追加的な考察が掲載されている。

¹⁶

「実証主義的理性が他のすべてを排除してこの分野を支配している場合……倫理や法の知識の古典的な源泉は排除されてしまう」——2011年9月22日、ドイツ連邦議会におけるベネディクト16世の演説より。

¹⁷

たとえ偶然の一致であったとしても、脳機能のほぼプログラム化された順序を根本的に変えることはなく、単にいくつかの予測不可能な要素によって「緩める」だけである。

い。究極的に、物理的世界の起源は物理理論ではなく、根本的な哲学的問いである。

要約すれば、カントが『¹⁸』で提示した人類の偉大な実存的問いは、物理学の解釈の範囲を超越していると言える。

最後に、自然主義的パラダイムは極めて直観に反するものであることに留意すべきである。なぜなら、すべての人間——その信奉者や提唱者でさえも——は、日常生活において、あたかも自らの自由意志で倫理的決定を下したり、科学を実践したり、世界から秘密を解き明かしたりしているかのように振る舞っているからである。議論が複雑になればなるほど、神経学的プログラムのみが議論の展開や相互作用を決定しているという考えは、ますます不条理に思えてくる。

現時点で特定の哲学的・宗教的概念について論じるつもりはないが、それでもなお、人間の尊厳（およびそこから派生する権利と義務）の決定には、さらなる実存的問いへの余地を残す、超越的な世界理解が必要であると言える。「西洋的人間観」——ただしこれに限らない¹⁹

——は、必然的にこの人間観、ひいては現実全体に対するこのような見方を前提としている。

結局のところ、これは利用可能な複数の選択肢から自由に選ぶという意味での恣意的な選択の問題ではない。実際、利用可能な現実はただ一つであり、それは

人間の制御を超えたところにある。その本質が何であれ——そしてそれに関する議論がいかにか白熱しようとも——現実をあるがままに受け

¹⁸ 「哲学の領域は.....以下の問いに還元することができる。1) 私は何を知ることができるか? 2) 私は何をなすべきか? 3) 私は何を望むことができるか? 4)

人間とは何か?」（『純粹理性批判』B833、1787年）——1897年から98年にかけて、フランスの画家ポール・ゴーギャンは、同様の根本的な問いを題名にした絵画を描いた。「我々はどこから来たのか? 我々は誰なのか? 我々はどこへ行くのか?」

¹⁹

新たな事物の能動的な認識、連帯や価値観、倫理や美学を語るイデオロギーや科学もまた、超越的な参照点を指し示している。それらにとって、そして西洋的なライフスタイルの多くの代表者にとって、このつながりはほとんど知られていないか、あるいは無関係に思える。

実際、そうでなければ、個人はあらかじめ定められた出来事の連鎖の中に自らを見失い、いわゆる精神は心理的幻想の絶え間ない流れの中に漂い去ってしまうだろう。そうなれば、科学の主張は不条理なものへと貶められ、人間は滑稽な操り人形へと墮落することになる。

入れる以外に選択肢はないと断言できる。現実こそが究極の正当性であり、他のあらゆるものの上に立つ。絶対者の主権が支配するのだ。

複数の断絶：進化と革命の間

一見すると、上述した西洋の概念は、現実というより政治的・宗教的ユートピアの領域に由来する、漠然と構築された社会モデルのように思える。

したがって、批判の核心はこうだ。もし、尊厳、権利、主権を持つ人間という概説された概念が、*現実において確かにその本性と一致しており*、その結果として生じる自由な社会秩序がそれゆえに適切な概念であるならば、なぜそれは歴史を通じて自ずと支配的にならず、むしろ生存をかけた闘いを余儀なくされてきたのか？

一見すると、この異議は正当なように思える。実際、歴史や現代を見れば、それは明白である。科学の歩みは比較的順調で、宗教や政治の影響も散発的なものに留まっていたのに対し、実現可能な社会形態の模索は、変遷に富み、時に方向を見失っているように見える。なぜその道はこれほど険しいのだろうか。

その答えは、様々な断絶、後退、持続、そして逆行といった現象にあり、これらは大まかに「混乱」として要約できる。これらは時空間的、社会的、文化的な多様な側面を持ち、互いに補強し合うことがある。

- 一時的な混乱：自由主義的な立憲国家の萌芽はあらゆる文化に見られるものの、その発展は、例えば古代ギリシャにおける初期の試みにもかかわらず、比較的近代的な現象であり、当初は国民の間で広範な支持を得ていなかった。市民が自らの権限と主権に目覚めた19世紀から20世紀になって初めて、人権や民主主義の理念が浸透し始めたのである——もちろん、その過程には周知の障害や挫折も伴った。
- 空間的な断絶：西洋的価値観が世界の一地域では定着した一方で、他の地域では伝統的な体制が依然としてその地位を維持している。これは、自らの主権に対する自覚の欠如に起因する可能性があり、ひいては自らの成熟度に対する啓蒙の欠如とも言えるかもしれない。同時に、この自然な発展は、政治的あるいは宗教的な勢力によって遅らされている。

- 時間的な断絶：自らの主権に対する自覚は人間存在の本質をなすものであるにもかかわらず、歴史上、かつて苦心して獲得した価値観を根本から問い直す（復古的・反動的な運動が繰り返し現れてきた。西洋的価値観——そしてそれに伴う繁栄——が世界的な魅力を帯びるようになったとはいえ、歴史的発展が決して自動的なものではないことは明らかである。これまでで最も重大な後退は、ヨーロッパにおけるファシズムの時代、とりわけドイツのナチズムであった。²⁰
- 個人のレベルでの混乱：自由民主主義への支持は、一般市民の間でも政治指導者の間でも、様々なレベルで弱まり、その対極へと転じる可能性がある。社会的、経済的、あるいは政治的な動向への不満でさえ、人間共存の最も根本的な柱の放棄につながりかねず、そこには常に社会全体の後退という危険が伴う。
- 文化的混乱：自らを自由で民主的だと考える社会を見渡せば、国境の内側であっても、国家の基盤となるべき基本的価値観について異なる見解が存在することがわかる。これは、民主的プロセスで決定される個々の法律や政治的方向性の問題ではなく、倫理、政治、宗教、文化に関する根本的な問いである。国をまたいでも、民主主義や自由に対する理解には、多かれ少なかれ顕著な違いがある。²¹
- 戦略的断絶：拡張主義的かつ権威主義的な勢力から自由世界を守り、自らの存続（軍事基地、原材料、同盟国）を確保することは、その国内体制が自国の価値観と矛盾する国家との戦略的同盟を繰り返し招く。道徳的ジレンマは明白であり、市民と政治家の双

²⁰

社会学者のユルゲン・ハーバーマスは、戦後ドイツで始まった民主主義の再編について、「*文化的西洋化が全人口の精神構造に浸透して初めて不可逆的なものとなる、経済的・政治的、そして後にはある程度文化的でもあるプロセス*」であると述べている（1989年7月のバーバラ・フライタークとのインタビューにて）。

²¹

もちろん、個人の尊厳や自由に対する社会の真の理解は、地に足がついた平均的な収入の中高年層には反映されていない。むしろ、真の価値観は、若者や高齢者、社会的弱者の置かれた状況、さらには刑務所や軍隊、個人の主権に影響を及ぼし得るその他の機関や権威における状況にこそ反映されているのである。

方に危険な無関心を招きかねない。²²

これにより、平等や恒久的な共存が正当化されているかのような印象が生まれる可能性がある。

法の支配に基づく自由主義的・民主主義的原則の発見と実現を、文化ごとに異なる前提条件を伴う漸進的な発展として理解するならば、そのような差異は当初から予想されるべきものである。歴史を通じて独裁体制から民主主義への革命的な動きが繰り返されてきたとはいえ、歴史的プロセスは本質的に漸進的なものである。

地政学とビジョン

超越性を受け入れる世界観の枠組みの中で、上述した人間性の概念が実際に現実と合致していると仮定すれば、たとえ挫折があったとしても、長期的には、自由で民主的な国家という理念が歴史を通じて優勢になるだろうと推測できる。

この観察は、個人の尊厳と自由が単なる哲学的概念から生まれたものではなく、世界中の多くの人々の意識に合致していることが明らかになった。20世紀には、すでに可能であった。²³ 実際、1990年代には数多くの民主化プロセスや平和イニシアチブが開始され、一部の研究者は、国際紛争を徐々に解決する「グローバルな内政」²⁴の出現を予見していた。

しかし、地政学的な観点から見ると、各国がそれぞれのペースと条件の下で民主的な共同体へと向かっているというイメージは、それとは正反対の現実によって覆われてしまった。なぜなら、「自由世界」の国家²⁵に並んで、権力の維持や政治的・宗教的イデオロギーの実施を第一の目標とし、必要であれば団結して西洋世界に反対する独裁政権が数多く存在し、また存在してきたからである。彼らは、遅かれ早かれ自由への道が開かれる、いや、開かれなければならないと密かに疑っているかもし

²²

何千年も前から知られている「敵の敵は味方」という戦略的原則は、存亡の危機においては戦略的に正当化されるかもしれないが、(権力) 政治的決定の倫理的基盤に取って代わることはできない。

²³

哲学者フランシス・フクヤマは、1989年という早い時期に「歴史の終わり」について語った。当時、世界中の人々が自らの権利と主権を要求し、それが普遍的な主張であることが明らかになっていた。

²⁴ 脚注4を参照。

²⁵ この代替用語も、東西冷戦以来、歴史的な意味合いを帯びている。

れないが、その洞察とそこから生じる結果に抵抗している。結局のところ、彼らは抵抗することのできない現実には抵抗しているのだ。

相反する原則：「二つの世界」

国際政治の舞台において²⁶

、権威主義国家と自由国家の間には重大な対立が存在し、その性質は根本的に非対称である。その原因は、社会的共存に対する対立する見解にある。

民主主義の世界において、国家は市民のために存在する。その唯一の正当性は、人々が尊厳を持って生きられるようにし、彼らの主権的な生活様式に対する侵害を可能な限り防ぐことにある。自由な社会において、国家はその行動を正当化し、より厳しい制限が必要であり、他に選択肢がないことを証明しなければならない。自らの自由を正当化しなければならないのは市民ではなく、介入を正当化しなければならないのは国家である。

権威主義国家や全体主義国家では、この原則が逆転している。宗教的、政治的・イデオロギー的、あるいは個人的な根拠にかかわらず、国家とその政治指導部が主権者となる。個人（もしそのような存在をまだ語れるとするならば）は、あらゆる点においてこの「国益」に従属する。

もちろん、その程度には段階的な違いがある。「穏健な」独裁政権は経済・社会活動を手つかずのままにし、政治的批判のみを弾圧するかもしれないが、全体主義体制は人々の思想や存在そのものを恣意的に支配しようとする。しかし結局のところ、個人は支配体制に対して無力であり、権利も尊厳も主張できず、行動の自由は上から与えられたものであり、いつでも制限されたり剥奪されたりする可能性がある。

実存的なリスクが彼らの生涯に付きまとい、社会的な共存——そして時には個人の人格までも——を細部に至るまで歪めてしまう。国家の理（レジームの存続）が支配し、人間の存在のあらゆる領域に影響を及ぼすのである。²⁷

²⁶

この比喩的な用語は演劇を連想させるが、何百万人もの人々が命と尊厳を失い、何十億もの人々が政治的、社会的、経済的に影響を受けているという点で、それは皮肉に聞こえる。資源の破壊は地球規模で起こっており、最終的には地球上のほぼすべての人々にその痕跡を残すことになる。

²⁷

現実には、これらの用語は、労働収容所や絶滅収容所、拷問センター、抑圧、そして想像を絶する規模の残虐行為を指しており、それらは最も深い実存的な深淵である。

国際レベル

権威主義国家におけるこの優先順位は、国際レベルにも反映されている。あらゆる努力は、支配体制の存続と権力の確保に向けられ、その他のあらゆる政治的・イデオロギー的目標は、この取り組みに従属させられる。

権力の維持が最優先されるということは、国内において人権や生態学的・文化的価値が制限され、無視され、あるいは弾圧されることをすでに意味しているため、これらの価値は、政権に対する現実の、あるいは認識された脅威との闘いにおけるプロパガンダとして以外、独裁政権の国際関係においても何の意味も持たない。

権威主義体制にとって差し迫った危険は、同類の体制から生じる。自国民の主権も他国の主権も尊重しないため、相互関係を規律する拘束力のあるルールは存在せず、力の原理が適用される。つまり、対外的な暴力は常に体制の存続を確保することを目的としている。国際レベルでは、弱肉強食の法則が支配しており、生き残るためには軍事力が必要となる。

不信感に満ちた環境下では、同盟関係はしばしば不安定であり、自らの存続は常に危機にさらされている。

抑圧的な体制にとって根本的な——内部的な——脅威は、自らの市民である。彼らは抑圧に抵抗し、個人の権利や政治的権利を要求しうるからだ。民主主義国家は原則として抑圧された人々を支持し、国際レベルで彼らの権利を擁護しているが（

）、その活動は通常、連帯の表明や決議にとどまっている。武力介入を伴うような積極的な支援は、極めて例外的なケースでのみ期待できる。自由世界は独裁政権による軍事攻撃から身を守るために同盟を結ぶことはできるが、抑圧された人々を救済する可能性は依然として限られている。

民主主義国家は、交渉、相互理解、善意に依拠しているため、一般的に軍事力や政治的圧力の行使を避ける傾向にある。さらに、外国による介入が国民から懐疑的に受け止められ、政治的決定者が支援を撤回せざるを得なくなるリスクが常に存在する。新たな選挙が行われるたびに、政治的風向きが変わる可能性があり、歴史的な同盟関係でさえ終焉を迎える恐れがある。

変化への開放性と、政治指導部が主権を持つ市民の意思に依存していることは、自由な社会の中核的な特徴である。同時に、この透明性と開放性は、権威主義国家の連合にとっての弱点となっている。

したがって、彼らはあらゆるレベルでの政治的プロパガンダを通じて世論や投票行動を操作し、人為的に引き起こされた危機によって各社会に挑戦しようと試みる。

その手段は、虚偽情報の意図的な拡散から、国境における移民圧力の創出、さらには軍事的な挑発や攻撃に至るまで多岐にわたる。これに加え、権威主義的な勢力に反対する個々の市民や組織に対しては絶え間ない圧力が加えられ、彼らはメディアによる攻撃や物理的な暴力の標的とされる。最終的な目的は、あらゆるレベルでの広範な行動を通じて民主主義国家を不安定化させ、それによって、世界的な自由の維持と促進への取り組みを阻害することにある。

政治家の間ですら、こうした権力や影響力の要因に対する認識はかなり限定的である。政治情勢を冷徹に分析するよりも、権威主義国家が平和的共存を望んでおり、民主化が進む可能性があると思える方が、人々の心を捉えやすいのだ。²⁸

さらに、自由世界——すなわち「グローバル・ウェスト」——の原則は、繰り返し誤解され、骨抜きにされている。

西側の公理

世俗的・宗教的イデオロギーとは対照的に、西側にはある種の「禁欲」が特徴として見られる。すなわち、終末論的パラダイム、経済計画シナリオ、ユートピア的社会モデルを欠いているのである。自由と尊厳に満

28

冷戦期のいわゆる「平和的共存」という表現は、同時期に発生した紛争という観点からだけでなく、欺瞞的である。

超大国間の核による膠着状態が直接的な軍事衝突を不可能にしたとはいえ、真に平和的な共存が可能になったのは、ソ連での変革と東欧の激動を経てからのことだった。したがって、この種の強制的な共存は一時的なものに過ぎず、独裁政権と抑圧された市民との間の強制的な内部共存と同じくらい一時的なものである。

ちた生活という約束は、実質的に内容のないものに思える。実際、それはいくつかの根本的な側面と構造に関するものである²⁹。西側の自由には、公理的な側面もある。

1. 絶対者の主権：開かれた超越的基盤

この現実観は、人間の本性および政治的・科学的活動を理解するための不可欠な基盤である。この基盤があって初めて、異なるイデオロギー的・宗教的参照枠組みを伴う、さらなる実存的側面について議論することができる。イデオロギー的制約のない自由で開かれた言説は、西洋の不可欠な核心である。

2. 個人の主権：自らの人生を形作る権利

人間の本性と尊厳は、現実に対する超越的な理解に基づいている。この人間観は、個人が自らの人生を形作る主権的権利を保障する基本的人権を生み出す。人間存在のこの実存的核は、根本的に疑う余地がない。すなわち、個人の主権は、民主的な決定においてさえも、侵すことのできないものである。

3. 国民主権：社会は自らの課題について自ら決定する

共同体の政治的規範は、民主的な起源、すなわち選挙や国民投票に基づいていなければならない。社会の発展は根本的に開かれたものである。国民主権は、国家レベルにおける個人の主権を反映している——両者の主権は相互に依存している。個人の自由が政治参加の中で開花するように、民主主義は政治的に成熟した——ひいては自由な——市民に基づいている。

4. 利益の組織化ではなく、価値観を通じた連帯

矛盾しやすく変化しうる主観的利益に基づいて結ばれた権威主義国家とは対照的に、西欧の知的基盤は、価値と尊厳が交渉の余地のないものであり、より深い客観的現実根ざし、したがって実際に適用される（

²⁹

これは、自由な立憲国家において、その長所と短所を伴いながらも十分に想定し得る官僚制を指すのではなく、むしろ人間に対するイデオロギー的な「プログラミング」の放棄を指すものである。

) という超越的な概念に基づいている。

国際レベルにおいて、この哲学的対比は、たとえ最も激しい政治的対立に直面したとしても、決して疑問視されることのない西側諸国間の連帯へと導かなければならない。これには、権威主義的な拡張に対して共に立ち向かうことも含まれる。

5. 地政学的ビジョン：普遍的西洋

30 「グローバル・ウェスト」の構想は、権威主義国家との共存を倫理的に正当化できるのはあくまで過渡的な場合に限られるという、普遍的なプロジェクトである。もし、普遍的な人間の尊厳と権利の正当性をあらゆる社会の基盤として受け入れるならば、それらを見做すことは克服されなければならない悪である。権威主義体制はその本質上、持続可能な存在を維持することができず、したがってその存在は限定的である。それゆえ、「普遍的な西洋」は、西洋の本質から切り離すことのできない、西洋固有の関心事なのである。

国民に対する民主的な説明責任を欠いていること——究極的には現実の哲学的基盤との矛盾に起因すること——により、*権威主義的政府は、この相互性の欠如ゆえに、せいぜい限定的な主権しか有していない。*³¹ *真の現実政治*、すなわち、地政学的条件と並んで常に人間の状況を行動の基盤と見なす政治的姿勢は、これらのつながりを決して忘れてはならない。したがって、それは、遠い将来どのような名称で呼ばれるにせよ、ここで西側の公理として提示された基盤の上でのみ、花開くことができるのである。

エピローグ：これからの四半世紀に向けた三つの格言

30

1990年代の経済や通信技術のグローバル化とは対照的に、我々が今目撃しているのは、哲学的基盤を持つ世界観の文脈における人間の尊厳のグローバル化である。それは、人類の民族的多様性が消え去らなければならないような画一的な文化のことなど、決してない。

31

独裁政権の打倒といった例外的な状況においては、政府の正当性が民主的プロセスとは無関係に一時的に生じることがあるかもしれない。しかし、いかなる場合においても、常に個人の主権が最優先されなければならない。

東西対立の終結後に訪れた、地球上のほぼあらゆる地域に少なくとも一筋の希望の光を投げかけた初期の希望に満ちた年月を経て、2000年代に入ってから、多くの地域で国際情勢は暗転した。

国際レベルにおいて、過去一世紀にわたる体制間の対立が、変容した形で再燃している。抑圧的な政権の軸が、権威主義的あるいは無関心な国家のネットワークと結びつき、自由世界に対する対抗勢力を確立し、徐々にそれを駆逐することを目標に掲げている。

この歴史的課題に直面し、グローバル・ウェストは長きにわたり防衛的戦略を追求し、権威主義の波がもたらす増大する危険を、軍事的、政治的、そしてその哲学的基盤の面において無視してきた。この侵食には二つの側面がある。一方では、いくつかの国家内で権威主義的傾向が台頭しており、他方では、軍事的連帯を含む相互協力が深刻な危機に瀕している。

この歴史的な試練において、リベラル運動の基盤への根本的な回帰が必要であると同時に、抑圧的な侵略者に脅かされている自由社会が、戦わずして屈服することはないという確信が、それ以上に求められている。自由の力は、政治的操作や軍事的抑圧を超えたところにその根源を持っている。歴史は、自由が最終的に勝利し、その存在を主張することを示してきたし、これからも示し続けるだろう。

「自由世界」という概念はいつか消え去るだろう。しかし、それは権威主義体制によって窒息させられたからではなく、その必然的な対極である抑圧の波が、そう遠くない未来に、願わくば引き潮のように去っていくからに他ならない。

今後数十年にわたる課題は、以下の三つの基本原則に要約できる

1.

人間の自由と尊厳の哲学的基盤、およびそれらがもたらす政治的帰結への回帰

20

世紀の哲学的正しさは、今や多くの場合、無関心や相対主義に取って代わられている。

生活のほぼあらゆる側面において意見の多様性が圧倒的であるため、ごくありふれた日常的な政治問題でさえ、しばしば巨大な課題となっている。このため、自由世界の基盤を探求することは、今日ではますます無益に思える。なぜなら、それは人々が容認はしても、決して議論すべきではない哲学的あるいは神学的な側面に関わるからである。この落胆は

必然的に視野の狭まり、ひいては意味の危機へとつながるため、我々はここから始めなければならない。

あらゆる自由な個人および国家の存在の出発点としての個人の尊厳は、必然的に現実に対する超越的な理解を前提とする。この基盤は——少なくともその核心的な側面と帰結において——政治的行動の中心に据えられなければならない。また、最終的にはそこから自らの存在を導き出す人々の意識の中にも、ある程度は位置づけられなければならない。

2.

自由世界共同体内における不確実性への対応としての、自由世界の地政学的方向性と相互安全保障

自由民主主義国家においては、ある国が自由世界の同盟から政治的・軍事的に離脱したり、その同盟そのものを疑問視したりするリスクが当然ながら存在する。こうした変遷はあらゆるレベルで予見し、予防的に対処しなければならない。

主権者である国民は、既存の価値観に基づく同盟を弱体化させるような結果を、いつでも投票によって選ぶ可能性がある。しかし、個々の民主主義国家自体も、

自らの消滅から制度的に保護されるべきである。国家間の同盟という枠組み内での、さらなる保護が望まれる。

価値観に基づく同盟体としての自由世界は、主要な安全保障の担い手一つ、あるいは複数の小規模な担い手が消滅した場合に生じうる安全保障上のリスクに対し、自らを防御しなければならない。これには、地政学的に重要な国家の備蓄に加え、可能な限り強靱で、個々の国家による単独行動の影響を受けず、かつ権威主義的なネットワークによる攻撃を最大限に抑止し得る安全保障体制が求められる。

3.

自由の歴史的勝利を自覚し、国際レベルで自由世界への一貫した持続的なコミットメント

相互安全保障の目標は、狭義の国益としての個々の国家の主権を守るだけでなく、自由世界の歴史的成果を——可能であれば後退させることなく——維持し、基本的人権に対する普遍的な主張を実現することにある

。したがって、グローバル・ウェストの防衛は、究極的には常に道義的に正当化された国益である。³²

したがって、グローバル・ウェストの諸国は、不備によって自由という理念の信用を損なうことのないよう、自国において自由民主主義の秩序を一貫して拡大し、確保することが賢明である。

対外的には、権威主義的パラダイムへの反対を明確かつ明白に示さなければならない。

哲学的レベルにおいて、独裁体制の存在は絶対性に対する冒瀆である³³。その支配と成果は相対的なものであり、そのイデオロギーは、それが具体的である限り、長期的な運命が予め決定づけられた偽りの哲学に過ぎない。それは完全な無へと帰結する。その権力者たちの栄光はすべて、真実の前ではいつか塵と化すだろう——ただし、あえて進路を変える勇気を持った指導者たちは例外である。

³⁴ここで言及された格言は、ユートピア的あるいは原理主義的なプログラムではなく、外交、地政学、現実政治を否定するものでもない。それらはまず、中途半端なものではなく一貫した伝統への回帰を求め、次に、21世紀においてますます顕著になっている不確実性からの防護を求めている。

究極の目標が人権の普遍性であり——それ以外、すなわちすべての人々のための自由な世界や普遍的な西洋を意味するものではないという事実（

）は、過去300年間の人権宣言に関して、もはや疑問の余地はないはずである。³⁵

³²

人権と基本的価値観に基づく政策は、飢餓、苦難、抑圧に目をつぶることはできず、また、紛争の解決が「国益」に反するとして無視することもできない。もちろん、実際の行動の選択肢がどのようなものになるかは、また全く別の問題である。

³³

理論的にも実践的にも根本的な方向感覚を失っている体制の非現実性を、これほど簡潔に表現する言葉は他にないだろう。

³⁴

ここでいう現実政治（Realpolitik）とは、日和見的な政治的駆け引きではなく、超越的な現実を含む現実とその含意を認識した、包括的な政治様式として理解される。

³⁵

1948年の『世界人権宣言』は人間の尊厳について述べているが、その前身であるアメリカやフランスの文書は不可侵の権利について述べており、いずれも非実証主義的な基盤を暗示している。

© 20世紀研究プロジェクトーグローバル・ウェストの哲学

詳細およびお問い合わせ：

20世紀研究プロジェクト

www.20th-century.net

グローバル・ウェストの哲学

www.theglobalwest.com

✉ www.steff.international/CONTACT/

- バージョン1 / 2026 -